

Title	『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の完成に寄せて
Sub Title	On the completion of The Keio Encyclopedia and An Encyclopedia of Yukichi Fukuzawa
Author	大日方, 純夫(Obinata, Sumio)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2011
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.28, (2011. ), p.257- 272
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集2：事典がひらく新たな世界
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0257">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20110000-0257</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 『慶應義塾史事典』『福沢諭吉事典』の完成に寄せて

大日方 純夫

ただいまご紹介いただきました大日方でございます。私の専門は日本の近代史なものですから、『慶應義塾史事典』と『福沢諭吉事典』は、願ってもない宝物を手にしたという感じで非常にありがたく、大いに活用させていただこうと思っっている次第です。まず、二つの大きな『事典』が完成したことをお祝いするとともに、事典をつくるということは非常に大変な作業ですから、ご苦労をお察しします。事典では項目を立てることが不可欠となりますから、どのような基準で、どのような項目を選びだすのか、その首尾一貫性ということが必要となってきます。また、論文などとは異なって、書き手の説だけを書くわけにはいかないということもあります。原稿が出てこないとか、そういうことも結構あったのではないのでしょうか。その意味で、非常に大変な作業を完成されたことに對し、あらためて敬意を表したいと思います。

後ほどお話ししますが、早稲田大学は「百五十年史」ということで、二〇三二年、つまりあと二〇年ちょっと後に「百五十年史」をつくることを、去年決定したところです。さて、どうでしょうかと思っっている時期に、二

つの大きな『事典』の完成に遭遇したものですから、これをどう見習うべきか、考えさせられるところです。今日は関西学院大学と日本女子大学という、二つの「先輩」の『事典』についてもお話をうかがいながら、私たちの場合はどうすべきか、作戦を立てていかなければならないと考えています。

## I 「事典」という思想と実践

### 1 二つの事典の編成

まず、なぜ事典なのかを考えてみたいと思います。先ほどの編纂のご説明のところ、十分準備ができていなかったからとか、資料がないからといったことで、正史ではなく、事典という様式を選択されたといった趣旨のお話がありました。では、正史でなければ、なぜ事典なのか。このあたりのところをうかがってみたいと思います。マイナス、つまり余儀ない選択としての事典ではなく、プラスとしての積極的な意味をどう打ち出していくのか。事典の効果、機能を十分にアピールすると、いつそうパワーが出てくるのではないかと思います。

『慶應義塾史事典』（以下、『義塾史事典』）と『福沢諭吉事典』（以下、『福沢事典』）という二つの事典がベアとなつて、ここに目出度く完成しましたので、早稲田大学と大隈重信のペアならばどうなるのか。両方とも、まだ事典がないものですから、後ほど少し思いめぐらしてみます。

さて、先ほどもお話がありましたように、事典の場合は、「引く」ということ、つまり「調べる」ということと、「読む」ということの、この二つの要素をどううまく統一するかが大きな課題となります。これは先ほ

ど関西学院大学の井上先生もご指摘になったかと思えます。日本女子大学の秋山先生のお話でも、やはり最初に「通史」を書いて、後のところに「項目」を入れたことでした。こうした点で見ますと、『義塾史事典』も『福沢事典』も、ともにある種、アイディアでは共通していると言えるわけです。

前半のほうでは流れを重視して項目別に追うとかたちをとっています。つまり、『義塾史事典』の前半の通史部分は、時系列で書かれています。項目を並べるといふかたちをとりながら、ある種、通史的な章・節・項に編成して、流れを追っています。個別の項目を単位としながらも、これを機械的に五〇音順に配列するのではなく、章・節のもとに体系化するという方式をとっています。通史的な流れを念頭において、これを項目で編成するという仕組みを想定されたのだと思います。

これに対して『義塾史事典』の後半は、箇所別・テーマ別になっています。『福沢事典』も後半は五〇音順の人名事典となっていて、ある意味で共通しています。ただし、五〇音順というのは、一人ひとりを読めても、互いの関係はなかなか読めません。「読む」という点では、一人ひとりを読むという性格にどうしてもなってしまう。何をどう読むのかということが、その「読む」には含まれてこざるを得ないと思います。

## 2 『福沢事典』を読む

『福沢事典』は完成したばかりで新しく、また、私の研究関心とも深く関わりますので、『福沢事典』に即してその仕組みを見てみたいと思います。「読む」という要素は、大きな区切りの「I 生涯」のところに非常によく出ています。流れを追いながら、しかも丹念に項目が立てられています。えっ、こんな項目が、というものも立てられていて、通常の通史的叙述では落ちてしまうようなものもあり、それぞれの項目を完結させる

かたちで書き進められているところに、事典的な項目編成の妙が表れています。

たとえば、自由民権運動に関わる部分には、非常に興味深い項目が並んでいます。民権運動に関しては、愛国社系政社の潮流、都市民権派の潮流、在地民権結社の潮流という三つの潮流があったとされていますが、研究レベルでは、近年、都市部での民権運動や文化史的な要素への関心が高くなっています。研究の流れとしては、まず、愛国社系に関する研究があり、つぎに在地の民権結社、豪農層に関する研究がさかんとなったのですが、一九八〇年代あたりから都市民権派の研究、つまり都市における演説会や結社、あるいはメディアへの関心が高まり、研究が重ねられてきました。そうした点からいって、「4 文明の始造」に含まれる「明六社」などの結社の動きや、「三田演説会」をはじめとする演説会の活動、さらにつぎの「5 建置経営」に出てくる『時事新報』の創刊と経営」関係の項目も含め、都市民権派にとっての福沢の位置を考察するうえで、『福沢事典』は重要な手がかりを与えてくれると考えられます。

さらに「5 建置経営」という大きな項目のなかに入っている「民権と国権」は、先ほど秋山先生がご指摘のところにも関わるのですが、大隈と福沢の関係を深く示す部分に当たります。「明治一四年の政変」の前提となる熱海会議以後の大隈の憲法プランと三田派との密接な関係を示す部分です。これはやはり非常に重要な部分であり、このことがあるがゆえに東京専門学校、すなわち早稲田大学があるという関係になります。つまり福沢の動きや、三田派の憲法プランによって大隈が政府から追い出されなければ、東京専門学校は実際とは大いに違ったかたちになったか、あるいはそもそも誕生しなかったかもしれない。そうした因縁からたいへん興味深く読んだのです。ただし、東京専門学校はこの『福沢事典』には出てきません。ちょっと残念だなという気もしました（笑）。

それから、「大隈の条約改正」に対する福沢の意見についても立項されており、興味深く読ませていただきました。また、後ほど触れますが、どう書くのかと思いつながら非常に注目したのが、「朝鮮問題と日清戦争」の部分です。これについては非常にバランスよく書かれています。避けることなく、また、単純な切り捨てはしないという立場で書かれており、興味深く拝読しました。

以上が「読む」ということに重点を置きながら項目を配列して、時代の流れを追っている、いわば時系列的な展開になっている部分です。

### 3 『福沢事典』を引く

これに対して、「引く」部分にあたるのは、「Ⅱ 人びと」の部分です。これは、五〇音順に配列された、いわば福沢人脈の人事データに関わる部分です。私は、大隈を助けて東京専門学校を創立するとともに、立憲改進党の結成と運営に深く関わった小野梓という人物の研究をしているのですが、そうした観点から見ると、犬養毅、牛場卓造、尾崎行雄、加藤政之助、波多野承五郎、藤田茂吉、箕浦勝人、矢野文雄といった慶應系の人たちの名前が浮かんできます。もちろん『事典』には出てくるのですが、後ほどちょっと触れますように、互いの関係がよくわかりません。出てくるのですが、五〇音順に配列された事典という性格から、人物ごとに書かれているため、相互の関係がどうなのか、福沢人脈のネットワークのさまが見えにくくなってしまわざるを得ないように思いました。

なお、先ほど触れました朝鮮との関係では、金玉均以下、徐光範とか朴泳孝とか、そうした朝鮮の人びとの名前が出ており、これも福沢ならではの『事典』の特色だと思いい、目を凝らしたところです。

さて、そのあとに配置された「Ⅲ 著作」では、福沢の著作がリストアップされており、解題も入っていて、たいへん便利です。それから「Ⅳ 漢詩」です。えっ、こんなもの、と思うようなかたちで、新たな福沢像に迫る非常に重要な手掛かりを与えてくれます。

さらに、これはいい、と思ったのは、「Ⅴ ことば」です。「人間」「文明」「社会」「学問」「教育」「実業」「立国」「処世」にわけて、福沢の思想のエッセンスが出されています。しかも、たいへん巧みな解説がついておりますので非常に読みやすい。学生もこれを読んで、なるほどと納得できることでしょう。とくに「人間」のなかの項目では、「男女」「家庭」といった側面からも、福沢のことばがピックアップされており、新しい着眼点としました。また、「文明」とか「独立」とか「立国」とかいう項目を読みながら、早稲田の側からすると、両大学の共通性と差異性がどのあたりにあるのかを比較できる、大変に便利な手掛かりが与えられたという印象を持ちました。早稲田が言う「独立」と、福沢の「独立」とは、どこがどう重なってくるのか。おそらく共通部分が大きいと思います。それから、「文明」については後ほど触れますが、そうした福沢と大隈との、ある種の共通基盤のなかで出てくる重要なキーワードがピックアップされており、注目すべき部分です。これをうまくまとめた学生版ができるといいのでは、と思います。福沢の思想のエッセンスが読める、福沢精神のコンパクトなものが見える、という気がしました。

それから「見る」部分、これが「Ⅵ 表象」、つまり図像の部分です。福沢の写真、遺品、墨跡や、福沢を描いた絵、旅行地図などから福沢に迫っており、展覧会を見るような感じで、楽しく学べる部分となっています。それぞれの図像には、丹念な考証を踏まえた解説が付されて、それぞれが、なるほど、と思わされます。

最後に基本的なデータが、「Ⅶ 書簡宛名一覧」「Ⅷ 『時事新報』社説・漫言一覧」「Ⅸ 年譜」「Ⅹ 基本

文献」に分けて掲載されており、至れり尽くせりという印象をもちました。いずれも大変に便利です。

#### 4 『福沢事典』の出来栄え——福沢の威力と編者の実力

福沢に威力があるからこそ、福沢であるがゆえにこそ、こういう事典ができたのだと思います。一方に、福沢という巨大な人物の業績があり、他方で、それを洩らすことなく把握して再現しようとする編集者の方々の努力と実力があり、双方がうまく共鳴し合って、この膨大な事典が出来上がったのだと思います。この点にあらためて感服しました。とくに、非常にこだわりを持ちながらつくられたところに感心しました。単に流すのではなく、徹底的に作ろうとした構えをうかがうことができます。

加えて、項目をどう立てるのかということにも、非常に細心の配慮がされており、たとえば「Ⅰ 生涯」の「6 晩年」の最後「次世代への付託」のところは、とくにおもしろく読みました。次の時代への期待をいろいろ整理されているわけです。「家族」「交際」「実業」「政治」「宗教」「学問」などにわたって、福沢のメッセージをどう受け止めるのかという部分が入っています。

それから、「7 日常と家庭」も、これまたおもしろく読めます。身体と気質、食生活、住居、趣味、執筆と揮毫、家庭、福沢家、交際、国内旅行など、大隈ならばどうだろうかと、大いに関心をかきたてられました。とくに、なるほど、と思われたのは、福沢家を支えた人びととして、乳母から大工、馬丁、さらには人ならぬ動物までが登場していることで、大変に感心しました。細大洩らさず福沢をキャッチしよう、全福沢像を把握しようという、編者の方々の視野の広さというか、執念のようなものを感じました。

つぎに、『福沢事典』の効果ということを考えてみます。私は万華鏡のように福沢を通して近代がみえる、



この事典を通じて、そんな印象をもちました。つまり、福沢が発する光から日本の近代を照らし出す。逆に福沢に光を当てる。さまざまな方向から福沢を照らし出すことによって、近代とわれわれを浮かび上がらせてみる。そうした試みにつながつてくると思います。いかんせん時代は福沢が亡くなるまでであり、幕末から日清戦後までと時期限定型ですが、そうした人物を通じて近代という時代の意味を問い直そうとする事典になっていて、項目編成の妙を感じた次第です。

さて、利用する側ということで、先ほど宮内先生から子細にご報告がありましたし、それから秋山先生からのご指摘、井上先生からのご指摘もありましたが、やはりへ引くへ調べるという意味では、事典ですから項目の完結性ということが問われます。流せないものがあるわけです。書き流すという方法をとると、いいところだけを取り上げて、サツと次に進んでしまうことができます。ところが、事典となると、その後どうなったのかということも、書かざるを得ない。徹底して調べて、正確を期さなければならぬ。これが事典の厳しいところです。曖昧さを克服しているという点で、事典というものは非常に便利です。ただし、逆に叙述の流れはどこおってしまいます。項目として完結することが基本なわけですから。

しかし、逆にへ読むということに重点をおくと、流れを重視しますので、それぞれの事柄の前提や結末、とくに結末は曖昧になりがちです。流れの表面に出てきたことは叙述されますが、表面から見えなくなると、叙述の上では消えてしまいます。しかし、見えないことは、なくなったことと同一ではありません。流れだけを追うと、その事柄や人物の行く末は見えなくなり、一体、その後、どうなったのかという疑問が残るようになります。また、その事柄や人物について調べたい場合、大きな流れのなかから探し出さなければなりません。索引があれば何とか追究できますが、調べようとしても、どう調べたらいのか、なかなかわからないという

ことにもなりかねません。

先ほど秋山先生が、問い合わせがあった際に、事典があったのでサツと調べられたという趣旨のことをおっしゃっていました。これがまさに事典の取り柄だと思えます。何かあったらサツと引いてみれば出てくる。そこを起点として、索引や、先ほど宮内先生からご指摘のあった各項目末尾の「参照事項」「参考文献」などを活用し、どんどん広げていくことができる。ここに通史的な叙述とは異なる事典の最大の機能、有効性があると思えます。

それから、実は事典にはへ知るゝことの楽しみもあるわけです。調べるだけでなく、その項目を眺めながら、さらに隣の項目などを見ると、意外な発見があるという、そうしたおもしろさもあるわけです。発見の楽しみです。知らない面が出てくるという点で、事典では項目がすぐに目に入ってきますから、そうした効果は非常に大きいと思います。ですから、先ほど井上先生から「これ（このような大きな事典）を学生がどう使うのか」というお話がありました。が、学生版の何かコンパクトなもの、つまり「福沢小事典」のようなものがあると、さらに便利ではないかという思いもします。

## II 早稲田の場合の《事典》

### 1 早稲田大学百五十年史構想と事典の位置

さてつぎに、早稲田の場合はどうなのかということなのですが、早稲田大学につきましては、「百五十年史」ということで、現在足場固めをしようと考えているところです。『百年史』を出したのですが、一〇〇周年に

近い時期になってくると、だんだん記述が薄くなってしまふ。戦後の部分も薄いという反省があります。そこで、これらをカバーしつつ、さらに一〇〇周年以後の、現在進行形の部分も含めた新しい「百五十年史」をつくろうとしております。創立が一八八二年ですので、二〇年ちよつと後の二〇三二年の完結を目指し、大体三巻くらいの編成でつくろうと準備を始めたところです。

最大の課題は資料収集で、これが決定的だということで作戦を練っているところです。同時に三巻の本体とは別に、まだはつきりしない検討事項ですが、資料集とか事典とかを追加することも検討しており、事典としては「大学事典・人名事典」を一応挙げています。では、これをどうつくるのか。「先輩」として三つの事典がありますので、知恵を絞らなければいけないと思っています。

「人名事典」が『福沢事典』なみの《大隈事典》になるのか、それとも早稲田大学関係者の人名事典になるのか、これはなかなか難しいところです。慶應の場合、慶應義塾と『福沢事典』はワンセットになるのですが、早稲田については、『大隈事典』と早稲田大学がワンセットになりうるのかどうかという問題があります。大隈はあくまで政治家であり、早稲田という学校の運営そのものに余り深くは関与していないからです。少なくとも学校の公式の場に登場したのは、開校から一五年もたつてからですし、総長となったのは創立二五年目にあたる一九〇七年のことです。総長だったのは、その後亡くなるまでの一五年間です。

## 2 『福沢事典』と《大隈事典》

そこで、『福沢事典』と《大隈事典》を比較してみたいと思います。といつても、まだ存在しない《大隈事典》と比べようというわけですから、勝手なもの言いになります。福沢と大隈が生きた時代はほぼ重なつて

いますし、二つの大学とそれぞれの創立者の関係を考える点でも、意味があるのではないかと思います。ただし、大隈の方が長生きでした。福沢は一八三五年生まれですから、大隈の方が三歳若いことになります。他方、福沢が亡くなったのは一九〇一年、日清戦後の明治三四年のことです。それに対して大隈は、一九二二年、大正十一年に亡くなっています。ですから、福沢が生きていた時代とはほぼ重なり、さらに二〇年ほど大隈が長く生きていることになります。

二人の基本的な性格を比べてみると、やはり福沢は思想家であり教育者です。これに対して大隈はもちろん政治家であり、狭い意味での思想家・教育者ではありません。

学校との関係についてはどうか。福沢はもっぱら学校そのものとかかわった“先生”です。これに対して早稲田では、普通、“大隈先生”とは呼びません。大隈老侯とか、大隈さんとか呼ぶわけです。小野梓とその門下のグループに学校の経営や教育を委ねており、バックアップはするけれども、表には出てこない。これは、実は早稲田の成立に深く関わっているわけです。早稲田の前身、東京専門学校は、「明治一四年の政変」における大隈の政府追放、つまり政治と深く結びつきながら登場しました。大隈は謀反人をつくるのではないかと睨まれていたということが、東京専門学校発足当時の状況です。したがって、大隈は学校にはタッチしないということ、学校に関わっているような、関わっていないような、そういう微妙な形でスタートしたわけです。その意味で、学校に距離をおいた大隈と、学校そのものと密接に関わった福沢という点で、同じ創立者とはいっても、スタンスは異なり、学校との関係も異なります。では、どう福沢と慶應との関係を参照軸にしていくなか。これは、早稲田にとつての課題だと思えます。大隈の思想、大隈と学校の関係だけでなく、むしろ小野梓とその下のメンバー、現在、「早稲田の四尊」と呼んでおりますが、高田早苗、天野為之、坪内逍遙、市島謙

吉らを組み込まないと、たぶん早稲田の事典はできないだろうと思います。早稲田大学の流れに占める大隈の位置には、単純に福沢とは同一視できない部分があります。

さらに、大隈研究には厄介な問題があります。福沢は書くことが仕事ですが、大隈はそもそも文字を書きません。書こうとしなかったことが大隈の大きな特徴です。書いたのは公文書の署名以外には二点だけだというふうに言われており、このように文字を書かなかった大隈ですから、大隈が書いたといっても代筆によるものもつばらです。しかも、著者が大隈だとは言ってみても、大隈が自分でどこまで書いたかはよくわからない。座談とか回顧録はさまざまありますが、純粋な著作はどこまでなのか。その意味で、福沢には『全集』があり、福沢が出した手紙がありますが、大隈の『全集』はなく、大隈にかかわる手紙は「関係文書」、つまり大隈のところに来た手紙がもつばらです。出した手紙は出てこない。このような問題があるわけです。

また、福沢にはいい伝記や研究がいろいろあるのですが、大隈の伝記はあまりありません。研究も福沢に比べると進んでいません。その意味で、研究を進めながら作業の進捗をはからなければならぬというのが、『福沢事典』と比較しての『大隈事典』の困難さだと思います。はたして『福沢事典』のようなものができるかどうか、『大隈事典』をつくるのはなかなか大変です。

ただし、「早稲田学」ということで、大学史資料センターでは二〇〇九年度から学生向けの講義を担当しております。春に大隈重信について一五回教え、秋には早稲田大学の歴史を一五回教えるということ、これを二年間やり、この四月からはじまる二〇一一年度が三年目となります。そうしたなかで大隈重信の全人物像と、早稲田の大きな流れを、どう語り、どう伝えていくのかという点では、それにふさわしいわば事典的なもの、小事典的なものが必要不可欠だという印象を持っています。その点で、まずこうしたところを足場にしながら、

《事典》的なものを準備し、「二五〇年」を展望していきたいと考えています。

試しに《大隈事典》ならどうなるのか、『福沢事典』にならって構成を書いてみると、「Ⅰ 生涯」（幕末→新政府の官僚→下野と政党結成→外相・首相・政治家→教育・文明運動→日常と家庭）、「Ⅱ 人びと」（大隈をめぐる人的ネットワーク）、「Ⅲ 著作」（単行本五〇冊以上）、「Ⅳ ことば」（演説・座談などから）、「Ⅴ 表象」（写真・銅像・遺品・絵など）、「Ⅵ 年譜」、「Ⅶ 基本文献」といった感じです。結果的に、かなり抜けるものが出てござるを得ないと思います。

### Ⅲ 「辛口の注文」という注文に答えて

#### 1 三田キャンパスと日本の「ポリス」

さて、最後に、西澤先生から「辛口の注文をしてほしい」と言われておりますので、あえてさせていただきますことにします。

まず、個別的なことでは恐縮ですが、私は日本の警察の歴史も研究テーマにしており、つい最近、書いたもののなかで、福沢にも言及しました。実は『福沢事典』の一〇五頁から一〇六頁にかけて「三田移転」という項目があり、ここに「巡邏」の話が出てくるのです。これは非常にもろい項目で、日本の警察制度のスタートに福沢がいかに関わっていたのかを示すものです。ただし、警察研究という角度からちよつと注文をつける、おそらく『福翁自伝』に基づいて書かれているのだと思うのですが、もう少し深めると、ポリス制度創設と福沢との関わりが、さらに明確になっただろうと思われれます。これは、三田の校地を手に入れたことと密接

にかかわる事柄ですので、慶應のみなさんにとっては、とくに大切な事柄かと思えます。

一八七〇年閏一〇月（陽曆一二月）、福沢は参議広沢真臣の依頼をうけて、「取締の法」と題する文書を東京府に提出しました。これは、三年前、二度目の渡米の際に持ち帰った事典『ニュー・アメリカン・サイクロペディア』のなかの police の項目を、ほとんどそのまま訳したものだといえます。福沢は police を「取締」と訳して、「兵力」とは別個のものだとしました。これを踏まえて、東京府は一二月、西洋の規則ならって「ポリス」を設置したいと申請したのです。その後、さまざまな経緯はありましたが、翌年一〇月、「邏卒」という名称で東京には三〇〇〇人の「ポリス」が設置されることになったのです。

## 2 立憲改進黨と三田派の関係

つぎに大隈との関係についてです。索引を活用しますと、「Ⅰ 生涯」のなかの三八頁分で大隈に言及があるようです。中心は「明治一四年の政変」の部分と、「大隈条約改正案」に関わるところです。

ところが、私の研究関心からすると、立憲改進黨の結党と慶應義塾、三田派の関係がよく見えないのです。改進黨の主要な構成要素である東洋議政会は、福沢門下の三田派とされているのですが、これが何なのかよくわかりません。尾崎行雄や犬養毅や矢野文雄らがどう絡みあいながら大隈を支えていたのかというあたりをぜひ知りたい。立憲改進黨については、小野梓関係の史料はいろいろあつて書けるのですが、三田派の動きがよくわからないのです。小野の史料からは、小野中心の立憲改進黨の姿が浮かび上がってくるのですが、実際に大きな影響力をもっていたはずの東洋議政会系が見えてきません。『福沢事典』に何かないかと思つて見たのですが、やはりありませんでした。

### 3 文明をどう問うか

以上の個別的な事柄とは別の大きな問題は、文明をどう見るのかという点です。文明は福沢にとってはもっぱらプラスととらえられており、大隈にとってもそれは同様であったわけです。『文明論之概略』を書いた福沢に対して、大隈は「東西文明の調和」を主張し、大日本文明協会を推進しました。

しかし、「文明」を裏返せば、文明の反対には、これは事典の項目にもありますが、「未開と野蛮」が控えているという構造になります。その意味で、文明によって淘汰されるべき野蛮とは何なのかという問題、こうした問題を含めると、同時代のなかでは自明のことであった「文明」のプラス面が、改めて問われてくることになります。今に生きるわれわれにとっては、「野蛮」なるものをどうみていくのかという点での検証が必要になってきます。

福沢、大隈らと同時代の視点、彼らが生きた時代の課題を見据える目、つまり、近代化、文明化を同時代の構造のなかでとらえる視点は不可欠ですが、しかし、同時に現在からみて、それをどう超えていくのかという視点を組み込んでいくことも、厄介ですが、重要な課題だと考えています。

### 4 アジアとどう向き合うか

これともかかわって、とくにアジアに対してどのような目を向けるのかという点が重要です。朝鮮への視線、あるいは清国への視線は、文明という点からすれば、明らかに克服の対象、援助の対象になってくる。援助するということは、すなわち「こちら側」が相手に対して優越した立場にあるという構造になります。その意味



で、朝鮮に対する「援助」の背後には、介入・干渉の要素が組み込まれているという厄介な問題が控えているのです。

事典では「脱亜論」には触れられていますが、では、「東洋盟主論」的な福沢の思想はどのようなのか。大隈にも同様な問題がはらまれています。いわば序列化の論理と言ってもいいかと思えます。そして、福沢にとって「脱亜論」があるとすれば、大隈にとっては「二一カ条要求」があるという問題を抱えているわけです。これをどのように受け止めて、人物の評価につなげていくのか、問われるべき大きな課題だろうと思えます。

もう一つ、『福沢事典』をめくってうかがってみたいと思ったのは、清国を福沢はどう見ていたのかということ。この点が、どうも事典からは見えてこないという印象をもちました。たしかに、朝鮮に対する問題はかなり意識的にとらえられています。しかし、朝鮮に対する挺入れは、清国との対立関係を生み出すことになり、儒教批判や日清戦争絡みで言いますと、中国に対する福沢の視線や福沢の評価は、やはり重要なポイントになってこようかと思えます。このへんについて早稲田絡みで言いますと、清国からの留学生受け入れとか、大隈内閣の時期の中国に対する「二一カ条要求」という問題が出てくるものですから、慶應の場合はどうなのか、福沢の場合はどうなのかということが気になってくるのです。

以上、いろいろと思いつくままに申し上げましたが、最後にやはり先ほど井上先生、秋山先生もお話になったのですが、デジタル化の問題とか、コンパクトな活用といったことで、何か見通しがあればうかがって、参考にさせていただければと思っています。ご清聴、どうもありがとうございました。